

# 越中万葉



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年（七四六年）から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなざる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのぼります。



魚津総合公園の万葉碑



立山の

雪消らしも

延槻の

河の渡り瀬

鐘浸かすも

揮毫 中尾哲雄

立山たちやまの 雪ゆき消らしも 延槻ひいつきの  
河かはの渡り瀬わたせ 鐘浸かねひたかすも

大伴家持（巻十七四〇二四）

## 《歌の解説》

越中守となって二年後の天平二十年（七四八年）春、家持は国司の職務である「出挙」を行うため、自ら巡行しました。「出挙」とは、古代に行われた農業の推奨策で、春先の種をまく時期に、種もみを貸し付け、秋の収穫時期に収穫された稲に利息を加えて徴収する制度のことです。この巡行は、雄神河（庄川）、嶋坂河（神通川）、婦負河（神通川）、延槻河（早月川）を渡った後に、能登半島を巡り秀作を残しています。延槻河（早月川）は、北アルプス立山連峰の剣岳を源とする河川で、魚津市と滑川市の境界から日本海に急こう配で流れ込んでいます。春先に豊富な雪解け水が注ぎこむ川は、秋の豊作をもたらしてくれたことでしょう。この歌を記した写真の歌碑は、『越中万葉歌碑まぼび』（平成22年富山県教育委員会発行）によれば、県内最大の歌碑として紹介されています。この歌碑の高さは、4.5m。魚津水族館に隣接する魚津総合公園に、どしどしと建っています。同公園は、魚津市の校の名所としても知られており、ソメイヨシノ340本、オオシマザクラ60本の桜が咲き誇り、多くの市民を楽しませてくれます。